

Title	ビルマに於ける文化遺跡
Sub Title	
Author	Duroiselle, Chas(Duroiselle, Chas)
Publisher	三田史学会
Publication year	1942
Jtitle	史学 Vol.21, No.1 (1942. 9) ,p.123- 141
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	東亞資料欄
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19420900-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東亞資料欄

ビルマに於ける文化遺跡

序

ビルマが大東亞共榮圏の一翼の本に輝しい發足を初めるに至つたことは其誕生の産婆役となつた我國にとつて極めて悦ばしき事柄であるが、東亞の指導國家として我國がビルマの新建設に各方面より援助してやることが緊急の要務と云はねばならぬ。

ビルマは面積約六十萬五千方呎で、我帝國より七萬六千方呎ばかり小さいだけである。人口は一九三九年に一千六百十一萬九千人であり、一九三一年に一千四百六十四萬七千四百九十七人である。廣大な地域を持ち、農業、森林、鑛産の富を持つに拘らず、一平方哩に僅か六十九人七と云ふ人口密度しかなく、印度より遙かに寡少な密度である。鐵道、道路の不足は此資源國の開發を遅延せしめたが、最近に於ける諸般の文物の發達は目覺ましくその洋々たる將來が期待されてをる。ビルマの種族は實に數多く、一九三一年の國勢調査の報告には百三十五の土語が區分せられ、一九一七年の言語豫備調査には二百四十

二の言語、方言を登録した。ビルマの歴史は未だ充分調べられず、今後の努力に俟つべき所が多い。考古學も漸く今手をつけ始めたばかりである。「ビルマの種族」を公刊したエンリケス少佐はその序文に於て「此地に於てはあらゆる困難にも拘らず研究に對する魅惑が存する。何處を向いても探險すべき處女地であり、政府の手引書の覆紙の間にもあらゆるローマンズの種子が介在する」と云つてをる。

ビルマには古くモン・クメル族が侵入し、その上に疏散したが、次いでチベット・ビルマ族が、チン・カチン、ビルマ、ロロの三つの主流となつて侵入した。チン人はチンダインの流に沿ふ線を取り、西側ビルマ全體に汎り、山脈に沿ひ散布し、カチン人は遙か後に之に追従し、上ビルマに入つて東南に轉じた。ロロはメーコンとサルウエンの路をとり、主として支那側に居住し、今日ビルマ領たる地方のごく東端にのみ侵入してをる。原ビルマ人の主要の波は西歴の初頭に中央即ちイラワダイの路をとり南下し、モン・クメル族と遭遇し、之を南方に退却せしめた。彼等の中ピューはプロムに首府を建設し、再び集結して抵抗するモンとプロムの線に沿ひて互ひに勝敗あり、最後にピューその他が北方に追ひかへされた。ついでビルマ族はバガンに集結して新たな首府をつくり、爾後ビルマ人、タライン人（モン）はビルマ全土に汎り流血の抗争を續け、北方に於てはビルマ人とシャン人との間に同じ様な抗争が行はれた。以上が約説せられたビルマ史であり、精密確實なる歴史はなほ今後これらの諸中心地を基點とする考古學的金石學的研究によつて證明せられねばならぬ。

此處に譯出した一篇は Sri John Cumming の編纂した *Revealing India's Past*, London, 1937 の中
第八章ビルマの部分であり、擔當執筆者はビルマ考古學の權威者なる佛人デウロアゼル Durosselle 氏
である。

一、保存事業

ビルマに於ける考古學は比較的に新しい。印度に於けるよりもはるかに最近に屬する。一八五五年、H・ユール Colonel H. Yule がファイル少佐 Major (later Sir Arthur) Phyre (後にサー・アーサー)の書記官に任命され、當時の印度總督ロード・ダルホジイ Lord Dalhousie に依つてファイル少佐がアヴァ Ava のビルマ宮廷に派遣されたのに隨伴したが、ユール大佐の紀行文にはパガン Pagan に於ける遺物やアヴァ及びアマラプラ Amarapura に於ける遺跡に就いて若干の興味ある記述を含んでゐる。(註一)

約四十年後、テンプル少佐 Major (later Sir Richard) Temple (後にサー・リチャード)は下ビルマに於ける重要な地點に探訪旅行を試みたが、その結果は彼の注意を引いた古代遺跡の興味ある短い物語となつた。(註二)正式に任命された最初の考古學者はE・フォルクハムマー Forchhammer 氏で、氏は同時にラングーン大學巴利語の教授をも兼ねてゐた。然し氏はその努力を上ビルマ一帯に散在する多數の碑文の拓本をとることに主として注ぎ、これらの拓本は氏の歿後出版され、數冊の書物をなしてゐる。氏は一八九〇年夭折し、その後任者は任命されなかつたが、一八九九年になつて、漸くその名に適しいやうな考古局 Archaeological Department の設立が認可され、その最初の職員にタウ・セイン・ノ Taw Sein

氏が選ばれたのである。當初この考古局の仕事は遺跡のリストを製成するのに向けられたのであつて、數部門に分つて考古學的研究が眞に始つたのはそれから亦數年後のことである。

ビルマは印度、西藏、支那、暹羅及びマレー聯邦に圍繞されてゐるのにも拘らず、その國民の文化、藝術、紀念碑等は殆ど總てが印度に由來してゐる。東部の沿海地方——タトン Thaton やプロム Prome——は西曆の初め、二世紀又は三世紀、或ひは更にいくらか早い時期に東南印度から植民されたのであるが、然し五、六世紀以前に遡るものは未だに何も發見されてゐない。この様にして輸入された文化は若干の國々の主都及び小數の第二次的な都邑に限られてゐた。その結果、ビルマに於ては考古學的中心が殆どなく、又パガン Pagan にあるのを除いて一時は多數に上つたに違ひない宗教的遺跡が事實上消滅し、一方にはデルタ的地域の破壊的氣候、他方には絶間なき戰亂によつて形骸を止めぬ土壤や煉瓦の塚が残るのみとなつたのである。かくて僅かに眞の考古學的中心と目されるのは第一にはプロム Prome であり、此處に於ては發掘物は稍々豊富であるが、然し遺跡が少い。第二にはパガン Pagan である。こゝは大分年代が新しくなるが、素晴らしい寺院が林立して居り、乾燥地帯の氣候で幸ひ大した損傷もなしに保存されてゐる。第三はマンダレイ Mandalay である。こゝは建設されてやつと八十年経つたばかりで最も新しく、その奇妙な木造建築で知られてゐる。保存と云ふことが考慮される限り、考古局の仕事は主として、マンダレイ及びパガン、殊に後者に集中されてゐる。保存するに價する程の遺跡の寡少に

よつて、他處では保存工事を大して必要としないし、又保存された遺跡とても建築學的興味よりは歴史的興味を持つたものばかりである。一二八六年、忽必烈軍の手にパガンが陥落した後、多少なりとも重要な都市が上ビルマに於て六つ以上も建設された。然し、この偉大な都市の陥落とともに建築技術は逆行を來し、漸く國民がその状態から回復せんとしてゐる現状である。大概の遺跡はパガンのものの貧弱なる模倣であり、而もその壯大さや意想の廣さを缺いてゐる。又劣惡な技術に禍されて、大多數は既に久しい前から修繕不能のひどい状態になつてゐる。只いくらかゞ保存に價すると考へられたが、然しその多數は歴史關係のものである。かゝる例は、メツカヤ Mekhaya、アヴァ Ava、サガイン Sagaine、及びアマラプラ Amarapura に於て見られる。これらのものには更に古い首都や都邑の崩壊した城壁も加へられよう。

マンダレイはビルマ帝國最後の國都である。それは上ビルマが一八八五年、英國によつて併合される前までの最後の王であるミンドン Mindon 王によつて建設されたものである。従つて、マンダレイの遺跡は全く最近のものであり、それが急速に姿を消しつゝある所の木造建造物の最後、且最善の標本に屬するのでないとするれば、その考古學的觀點からする價値は殆どなくなるであらう。建築學的興味の無い、若干の石造のパゴダ Pagoda 及び寺院を除いては、この新しい都市の全興味は、ネパール、シヤム、支那及び日本に同系統として見られる如き木造建築に存するのである。多重の裾が擴つた屋根があ

り、その上には壇の多い尖塔 *stupa* が聳えてゐるこれらの美麗な建物は、ビルマ人の趣味及びその才能の素晴らしい見本である。これらの建築は都市中央の宮殿や市を廻る城壁に設けられた四十八の稜堡 *bastion*、現在も佛僧によつて占められてゐる數個の僧院等から成つてゐる。宮殿は嘗つて多くの主都に存在したと同様な宮殿の最後の代表であり、當然最も重要なものである。(註三) その建築に用ひられた材料——チーク材——のために宮殿は三十年も経つと多大の注意と管理と比較的に多額の経費を要し、將來も引續いて注意を要することになる。各宮室の高い屋根を支へてゐる多數の堂々たる柱の心に腐敗が始り、そして彫刻や建物の他部に擴るのである。斯うなると新しい柱を支へに立てたり、彫刻や床板の或部分を新しくすることが必要となつて來る。重要な玉座の間を被ふてゐる美しい多重の屋根や尖塔は一九〇六年に改築されねばならなかつた。近い將來、宮殿は總ての部分が改築されて、原形の單なる影像に過ぎぬものとなるであらう。然しながら、吾人にして若しビルマ人にとつて幾世紀の間その國民的壯大さの化身であり、傳統や慣習を培つて來たこのビルマの俗的建築唯一の標本を尙も保存すべきであるとするならば、あらゆる勞力と經費とを拂ふも又充分價值のあることたるを失はない。市の城壁にある稜堡も速かに腐朽し去る。それは絶間なき修理とより大なる經費を要する。然しこれはマンダレイ獨特のものであり、全ビルマに一つしかない。以前には同様に公費で維持されてゐた七つの僧院は（現状の）宮殿や稜堡よりもむしろ見事である。永年、その保存のため多くの注意が拂はれたのであるが、絶

間ない火災の危険により、遂ひに保存紀念物のリストから除かれてしまつた。この優雅な木造建築は近き將來ビルマの地面より消去る運命にある。これらの僧院が崩壊すれば、一般に醜い石造建築によつて代られるのである。

ビルマ人の都であるパガン^(註四)は西紀八四九年に建設された。一〇五六年から五七年にかけて、ビルマ軍は南下してプロム及びタトンを占領した。そして後者から彼等が現在尙も信仰してゐる小乗佛教 Hinayana Buddhism や文字や文化や藝術を受入れたのである。都市やその近郊を無數の卒塔婆 stupa や寺院で埋めた所の驚くべき建築活動が始つたのはこの時からである。然しこれら建築の多くは一二八六年、忽必烈軍に對抗して都市を武裝するため取毀はされ、やがてパガンは陷落し、ビルマの都ではなくなつたのである。そこには現在尙八百の遺跡があるが、それは長さ八哩、幅四乃至五哩の廣大な地域に亘つてゐる。入念な調査の結果、最もよく保存されたものの中、多數のものが二種類に分けられる。その大部分は盜堀を防止する價值あるものとしてリストされ、その中四十八のものは保存すべきことに定められた。後者は更に二つの主なる群に分けられる。第一の群は卒塔婆 stupa で、これは多少長くなつた鐘形の覆鉢に一つの盤蓋 *umbrella* (傘) 柱頭を冠せた環狀の尖塔が立ち、全體のつくりが裾に擴つた基壇の列の上にあり、數は通常三つか五つかより成るパゴダのことで、その美しい例はマンガラゼディ Mangalazedi パゴダである。第二の群は通常寺院 temple と呼ばれるものよりなつてゐる。これは

圖面では矩形をなし、或るものは僅かに一層の高さで、入口に當る玄關をもつてゐる。内陣の上には基壇の上に跨つてシカラ *śikhara* (尖塔) が立つてゐる。その他のものは中心となる煉瓦の巨大な堆積があり、その周りには一つ又は二つの壁がめぐらされ、一筋又は二筋の廻廊をなしてゐる。又或物は二、三或ひはそれ以上の内陣が出で、大きさを次第に減じ、その頂上から尖塔が立つてゐる。かゝる建造物の素晴らしい例がゴダウパリン *Gawdawpalin* 及びタトピイニユ *Thatpinyun* である。パガン獨特と思はれるこの巨大な建築物は多分ベンガルから來たものであらう。(註五) これら四十三の石塔の中、四十一のものは完全に修築され、他のものに對する工事も始められた。これらのものは腐朽のあらゆる段階に於て見出され、そして大抵の場合それが全く破損し去るのを防いでゐるのは乾燥せる氣候と段の設けられてゐる巨大な壁の厚みのためである。巨大な壁ののつかる重さを支へてゐる等邊のアーチはそれが一部分又は總體的に崩れた時には絶間ない危険の源となるのが時折見られる。工事は再建築ではなく、單なる保存の仕事であり、大抵は多くの原型が手近に見られる所の胸壁 *battement* のやうな部分の建て直しであり、又營造物を目立たしめるために、着色したセメント又は漆喰によつて新しい工事を原の舊い工事と融合せしめようと努力するのに過ぎないのである。

古都プロムでは、若し吾人がその廣大な地域に散らばつてゐる廢墟の塚の數多いことから判断するならば遺跡もパガンに於けるものよりはるかに古く、且つ非常に豊富なものであるに違ひないことを思は

しめる。只いくらかの遺跡が五・六世紀から九世紀或ひは十世紀にわたるものと推定される。これらの中から三つのものが保存せられた。ボウバウジイ Bawdawgyi は堂々たる長形の卒塔婆であるが、形は圓錐形に似、古代印度に於ける卒塔婆の面影に似通つた所があり、五つの基壇に載つてゐる。他の二つ、即ちベベ Bébé 及びレメトナ Lemyethna は規模は小さくなるが、パガンにあるものを聯想させる體裁の寺院である。

上述せるやうにビルマに於ける文化と藝術は二、三の限定せる中心地、即ちタトン、プロム及びパガンに集中されてゐたのである。これらの地はいづれも宗教的生活の濃厚な古都であり、又その結果、建築活動は多くの遺跡を生んだのである。然しタトンに於けるものは——少くとも保存する價值あるものは——残念ながらすでに消滅し果てた。プロムに於ても同様で、こゝでは尙二、三見受けられるのみである。かくてパガンだけが古代の中心となつたのである。六つばかりの新しい都市に於ては疑もなく宗教活動は盛であつたのであるが建築學的才能及び建築の技術は大抵は第二流のものであり、又遺跡が豊富にあるのにも拘らず、マンダレイに於ける美しい木造の遺跡を除いては殆どが保存するに價しないのである。

二、發掘と調査

ビルマに於ける發掘活動は印度に於ける夫と比較すれば問題にならぬ。この理由は發掘される各地夫々の性質に依るのである。例へばプロムにあつては、その地は寺院や卒塔婆或ひは僧院が會つて立つてゐた場所たるを示す中位の大きさの多數の塚及び發掘の際、その土臺の殘存によつて露にされた遺跡の類を含んでゐるのである。只僅かのもののみが大きくそして重要である。こんな譯で、ビルマに於ける發掘は一般にかゝる多くの小さい塚を解明するのに限られて來たのである。時々遺跡はその建設のコースが辛うじてたどられると云ふやうな荒廢した状態になつてゐる。然しながら、時を経るに従つてこれらの塚は多數の發掘品を出し、その或物はビルマの政治、宗教、藝術の歴史の解明に重要であることが解つて來たのである。

タトン及びその近郊に於ける古代遺跡の異常な貧困さは既に指摘した所である。(註六)傳説は現在のタトン市の西數哩に古都タトンの敷地があると云ふが、それは海の侵蝕で海中に没してしまつた。如何なる原因であるにせよ、タトン一帯の地方及びペグー地方から北西は十一世紀以前に遡り得る考古學的興味の古代遺物が目立つて少いことは事實である。古代遺物探求のための最初の意義深きタトン訪問は一八九四年、R・C・テムプル R. C. Temple 氏によつてなされた。氏は印度教の三身一體たる梵天 Brahma 毘溼奴 Vishnu 及び溼婆 Siva がアナンタ Ananta 蛇上に座せる那羅延 Narayana の臍から生えた蓮(註七)に坐せるのを表した三つの大きな石彫を發見したことを記してゐる。この巴利小乘佛教で名高い地に印

度教も榮えてゐたことを示す點に於て、これは重要な發見である。而して、これらの石彫は九世紀乃至十世紀のものと推定されよう。

九世紀の初めに建設されたペグー Pegu 即ちハムサーバティ Hamsāvati に於て、十一世紀——この時代から詳細且信賴すべき歴史が始まるのであるが——以前に遡る古代の遺物は上述したやうに頗る乏しい。然しそれより後に屬するものの發見はこの地を興味深く、且つ重要にして來た。一九一三年及び一九一四年の再度にわたるペグー訪問に於て、余はスウエグジイ Shwegugyi 及びアジパーラ Ajapala の二つの荒廢せるパゴダから綠、白、赤、及びチョコレート色の釉藥を施された一六七個の素燒の陶版を發見した。一群は魔羅 *Yonis* の戰士が佛陀に挑みかゝつて居るものであり、もう一組のものはその娘たちが佛陀を誘惑してゐる場面のものである。一六七個の中、八十六個は一四七五年—一五〇〇年頃のモン語で記されてゐる。一九一四年の寒期に印度文官勤務の J・A・スチュアート Mr. (now Dr.) J. A. Stewart, I. C. S. (現在は博士となる) はこの考古局から派遣されてペグー及びその近郊の考古學的調査を行つたが、その際氏は象頭神 Ganesa の神殿として傳へられてゐる地を堀つて、疑ひもなく女陰 *yonis* と思はれる二つの大きな石を發見した。その地が氏の發掘の暫く前に石材を得るために堀られたことは明瞭であり、そしてこの事は男根 *lingas* の發見されないことを説明しよう。こゝから更に見分け難い多くの印度教神像も發見された。これら發掘品の時代を正確に決定することは不可能であるが、

然し十世紀、十一世紀の兩世紀に跨がるものと思はれる。^(註八)種々の機會になされた短期の發掘で哲學者や史學者にとつて貴重な多くのモン語の銘刻やビルマの宗教史及び政治史(十五世紀)上重要な巴利語及びモン語で記された迦梨耶那 *Kalyani* の銘刻が發見されてゐる。^(註九)

西曆紀元の極めて初期に於ける古プロムの印度化に就いては既に述べた。土着民に文化及び藝術を與へた印度の植民者はこゝでなされた發掘品の殆どでなくとも多數のものによつて證明される如く、深い影響を残したのである。古プロムに於ける發掘品は主として祈誓額 *Votive tablet* や石彫や銘刻された金や銀の板を含んでゐる。これらの出土品は吾人をして、三つの宗教、即ち小乗佛教 *Hinayanism*、大乘佛教 *Mahayanism* 及び印度教 *Hinduism* が相並んでこの地で平和的に繁榮した事實を確證せしめる。規則正しい連続性は示さぬやうであるが巴利小乗佛教は全盛を極め、住民の大多數——即ちピエー・ラマによつて信仰され、他の宗派は印度の北部及び南部から移住したより小さい部落間に信仰されたことはほとゞ明瞭である。石彫は今日存するものより遙かに數が多かつたのであるが、多數のものは前世紀の七十年代、古プロムの市中を貫通するラングーン・プロム間の鐵道が敷設された際に請負人たちによつて無智にも破壊された。彼等はこれを壊し、路床の砂利として使用したので、吾人にとつて永遠に失はれてしまつたわけである。

一九〇五年から一九〇六年にかけての寒期、及びそれから二、三年後^(註十)ビルマを訪れたL・de・ペイリ

General L. de Beylié 將軍の前には、プロムは時たま探訪されたりするだけで、いくらかの重要な発見がなされたのにも拘らず、注目すべき調査はなされなかつた。然しこのフランス考古學者の好運なる諸発見はこの廣い分野に鋭い注目を導いたかのやうに思はれる。と云ふのはプロムは實に數多いだけでなく、又最も古代の発見もなされた處であり、これらの発見は西曆紀元の數世紀にわたつてこの國を取卷いてゐた暗黒に一條の眞に新しい光明を投げかけるからである。これらの重要発見の中で、一八九七年マウガン Maunggan と云ふ地方で発見された二枚の金の板及びほゞその附近で発見された三つの斷片より成るが、然し連續したテキストをなしてゐる一つの石彫に就いて述べねばならぬ、その文字は古代のカナラ・テルグ書體 Karara-Telugu script に屬して居り、いくらかの相異はあるがカダムバ(註十一)ス Kadambas の文字を極めてよく再現してゐる。これがピュト・スクリプトと呼ばれるに至つたものである。これらのものは巴利語經典からとつた文を銘刻され、六世紀或ひはそれよりいくらか早い時期のものとされてゐる。一九二六年、余は同様の文字を使用して銘刻され、同じく巴利語の聖典からの抜萃を含み、且同時期に屬する二十枚の金葉の寫本を発見した。この文書は當時、又はそれ以前にプロムに於けるテラバダ派 Theravāda School の存在を證するものである。祈誓額 Votive tablets は拔んでプロムに多い。そのかなり多數は興味がある。その中には時折、佛陀が二人の菩薩 Bodhisattvas 卽ち觀音 Avalokitesavara 及び彌勒 Maitreya を脇師としてゐる三尊を表し、そしてデヴァナガリ Devan-

tagari 文字でかの有名な文句、即ち「Ye dharmā Letuprabhava……」(萬象は一因より出づ、佛陀はその因を解明す)なる文を刻んであり、又かくして大乘教存在の證據となるのである。かゝることは更に他の若干の發掘物にも見られる。例へば六世紀から八世紀にかけての物と推定される四本の腕を持つた觀音の青銅製小像がある。その他のものは菩薩を伴はぬ佛陀を表してゐる。その台座の下には同じ文句であるが、巴利語で「Ye dharmā……」と記された文を含む一行の銘刻がある。又同じやうな祈誓額には同じ物語がサンスクリットで現はされ、これはサンスクリットの經典を使用した小乘教に屬するものらしい。一九二七年から二八年にかけて、同所で佛陀の大きな石像が發見され、その四角い台座の周圍に七世紀乃至八世紀のグプタ Gupta 文字による長いサンスクリットの銘刻があり、更に前者の逐語譯であると思はれる錯綜したピューーの文字も混じてゐる。毘溼奴信仰 Vishnuism はガルダ Garuda に跨り、四本の腕を持った毘溼奴の薄浮彫やアナンタ Ananta に乗つてゐる那羅延 Narayana の臍から出でた蓮に坐する梵天、毘溼奴及び溼婆を表してゐるもう一つの彫刻で示されてゐる。いくつかの骨壺は王室のために設けられた納骨堂であつたと思はれる箇所で發見された。これらの骨壺は西紀六七三年から七一八年にかけてのものと思はれるに假に推定されて居り、直系相續でプロムを支配してゐたと思はれる三人の王の名前が記されてゐる。(註十二)

バガンに於ける發掘と調査は古プロムのもの程古くはないが、それでも上ビルマに於ける宗教及び藝

術の歴史にとつて重要である發掘物の豊富な收穫を明るみに出したのである。ビルマ人の史家は十一世紀以前パガンには佛教が存しなかつたことを確言するが、それは單に巴利語の經典をもつた小乗佛教がその地で行はれなかつたことを意味するだけである。この時代以前に於けるパガンの宗教はアリヤヒの宗教であり、ビルマ人の迷信や大乘佛教、タントラ教 Tantricism、印度教の混合であつた。更にこの地ではサンスクリットの經典をもつた小乗佛教派の混合もあつたことが明らかである。十一世紀後半及び十二世紀の大半に屬する總ての發掘品は印度、特にベンガルからの濃厚な影響を示してゐる。印度人の熟達した手法はこの時代總ての彫刻や繪畫に見受けられるのである。こゝではプロムに於けると同じく祈誓額は驚く程多數で、その中大部のものは印度からビルマ人及び印度人の巡禮によつてもたらされたのである。その殆どは北印度の文字で例の文句「Ye dharmā」及び佛教徒の三身一體たる佛陀、觀音、彌勒の像を表はしてゐる。或物は當時のビルマ文字で書かれた巴利語の同文句を持ち、又或物は同じ文字或ひはナガリ Nagari 語で記された銘刻をもつてゐるが、その中には當時の王であるア Nilダー Aniruddha の名も現れて來る。最も興味ある數個のものはサンスクリット及び巴利語二國語の銘刻をもち、その中で上述ものと同じ名前が現はれ、或物はモン語で或物はピュー語ですら書かれてゐる。これら祈誓額の主なる興味はパガンに集つた諸影響について與へる種々雑多な觀點にある。佛陀の石像は圓彫であらうが薄浮彫であらうが、殆ど無數である。然し大多數のものは寺院裝飾のために續々と製作さ

れたものであり、何等藝術的に高級なことを示してゐない。パガンでは印度の美しい彫刻と比肩し得るやうなものはない。數に於て非常に少い青銅製の像は一般にはるかに優れた技術を示してゐる。然しこれとてもその多數のものは印度から輸入されたものである。青銅製では佛陀以外に菩薩や一、二の多羅觀音や毘溼奴や象頭神の像がある。毘溼奴信仰はガルダに坐せる幾體かの神像によつて示されてゐる。佛本生譚即ち佛陀の前半生を表はした釉藥のあつたり又ははないテラ・コッタの版も又多い。その最上のものはペトレイク・パゴダ Patleik pagoda に見出されるもの——これは非常に立派なもので、絶妙な型をもつてゐる——及びアナンダ Ananda 寺院にあるもので、こゝでは釉藥が細い部分をも埋滅してしまつたらしい。多くの寺院内の壁に於ける壁畫は大抵は美しく、且つよく仕上げられてゐる。畫き手はベンガル及びネパールから來た藝術家で、その壁畫法はヴァレンドラ派 Varendra School のよき標本である。その多數のものは十一世紀以前の幾世紀かの間パガンに存してゐた宗教の混合を實際に説明することに於て重要であり、それに現はれた多くの菩薩や女神 Saktis や多羅觀音 Tatas でもつて大乘佛教の、歪んだ恐しい怪物でタントラ教の、又その三主神や帝釋天 Indra や象頭神等で印度教の神殿バンデオンを形造るのである。これらの總ては小乘佛教的性格の景觀を交へ、時にはアベイヤダナ Abeyadana の例のやうに一寺院の壁が全部これで被はれることもある。

他處に於ける調査は更に多くの發掘品を明るみに出したが、これはパガンよりも後の時代、即ちビル

マに於ける藝術が頽廢的になり、一般にバガン時代のものの模倣となつた時代に屬するもので、かゝる譯で取立てて記す必要はないのである。

Chas デュロムゼル Duroiselle

註

- 一、"Narrative of the Mission sent by the Governor General of India to the Court of Ava in 1855." (London, Smith, Elder and Co., 1858) 尙サーA・マアイルは "History of Burma" (Fribner and Co., 1883) なる著があり、この中に考古學に就いての價値ある記述を含んでゐる。
- 二、"Notes on the Antiquities of Ramannadava" (コナムタマン地方) Indian Antiquary, 1894.
- 三、宮殿の全貌に就いては拙著 "Guide to the Mandalay Palace" (Government Printing Press, Rangoon, 1925) を見られたし。
- 四、プロムはビュー人の都であつたが、このビュー人は久しい以前に姿を消してゐる。タトンは一般にはタライン人として知られてゐるモン人の都であつた。
- 五、Chas. Duroiselle 著 "The Ananda Temple at Pagan," Memoirs of the Archaeological Survey of India, No. 56. を参照されたし。
- 六、上引書参照
- 七、上記引用書三十一—三十三頁
- 八、"Excavation and Exploration in Pegu", J. A. Stewart, I. C. S., Journal of the Burma Research Society, vol. VII, Part 1, pp. 13 ff.

九、"Epigraphia Birmanica" 参照。モン語は一部分 C. O. Blagden 氏によって譯出された。Blagden 博士は古代及び中世モン語の銘刻の重要性に就いてビルマ政府の注意を喚起した最初の人であり、學者的正確さをもつてその翻譯を出版されてゐる。

十、Architecture Hindoue en Extrême-Orient (Leroux, Paris, 1907), 頁 5 Promé et Samara を見よ。

十一、Finot, 'Un nouveau document sur le bouddhisme birman,' Journal Asiatique, Juillet-Août, 1912, pp. 123 ff. を見よ。

十二、C. O. Blagden, 'The Pyū Inscription' Journal Burma Research Society April, 1917, pp. 37 ff. を見よ。